

新型コロナウイルスによる肺炎が話題となっ ています。私は2月10日の情報を基に執筆して います。皆さんの手元に届く3月には、状況も 少し変化していると思います。紙面を通じて、 わたしが新型コロナウイルスの騒動をどのよ うに見ているかお伝えしたいと思います。

働くもののいのちと健康を守る高知県センター 岡田崇顧 (産業医)

新型コロナウイルスによる肺炎が話題となっ
ています。私は2月10日の情報を基に執筆して
います。皆さんの手元に届く3月には、状況も
少し変化していると思います。紙面を通じて、
わたしが新型コロナウイルスの騒動をどのよ
うに見ているかお伝えしたいと思います。

「病院に行けば、病気は治って (治してもら って) 当たり前」か?

ペニシリンという最初の抗生物質が発見されたの
は1928年のことです。つまり今から100年前には、
まだ抗生物質は存在しない時代でした。それ以前は、
血清療法 (菌体を少量ずつ動物に注射し、抗体をも
つ血清を作成する) を北里柴三郎が開発し、感染症
治療が行われていました。

直近100年間の医療の進歩は著しく、今まで治ら
なかった病気も、かなり治るようになりました。それ
で私たちの中で「病院に行けば、病気は治って当
たり前」という意識が生まれてきたのかもしれない。

病院の他にも「コンビニやスーパーに行けば、食
べ物や飲み物が手に入る」と現代人は思っています
が、100年前にコンビニは存在しませんでした。(コ
ンビニの原型が出来たとされるのは1927年)、肉
屋さん、魚屋さんで買い物をしていたことを私たち
は忘れかけています。

「労働」は「健康」の状態に影響を及ぼす一因子
です。労働の形が時代とともに変化していくことを
強調しておきます。

わたしは、新型コロナウイルスの出現は、私たち
の中に作りあげられた潜在的に常識と思っていたも
のを見つめなおす良い機会になると考えています。

なぜ、わたし達は不安を感じるのか?

新型コロナウイルスの一連の騒動に対して、不安
を感じている人が沢山います。不安の根本には「よ
く分からない」という状態にあることと考えます。
「よく分からない物、事」に「近づきたくない」「怖
い」と感じるのは極めて正常な動物的生存本能です。

また、ヒトという動物は感情に左右されるという
ことを知っておかなければなりません。しあわせ仮
説を唱えたジョナサン・ハイトは、「感情」を象 (非
常に大きい) に、「理性」を象使い (非常に小さい) に
例えています。象が大暴れしたときに、象使い



はなす術がありません。今、不安に包まれている人
は、自分の中の象使いを探す必要があります。

出来て当たり前、してもらって当たり前と 感じる現代人

新型肺炎について、わたしが危険と感じている論
調は「感染対策をしっかりすれば、感染拡大を食い止
められる」という論調です。「中国政府が初動を間違
ったから、WHO (世界保健機関) が重大さを見誤っ
たから酷いことになった」という意見が見られます。

科学の進歩により出来ることが多くなった反面、
現在の科学では出来ないことがあるという事実が分
かりづらくなってきています。現在は、まだ「感染
症を完全にコントロールできる時代にはなってい
ない」ことを私たちは理解しなければなりません。

情報が溢れる時代に、自分の意見を持ち、 情報を整理する

執筆を依頼された1月末時点は、某小売企業にお
ける接客時のマスク着用禁止について、マスクの正
しい着方法、企業において新型肺炎にどう対応す
べきかなどが話題となっていました。従業員のマス
ク着用禁止は、働く人の意見を十分に聞いた上で立
てられた企業方針とは思えません。企業は労働者の
声に耳を傾けるよう望みますし、またそうでなけれ
ばなりません。

インターネットによって情報の発信・受信速度が
上がっています。新型肺炎に関しては、多くの専門
家からの情報発信がされ、日ごとに更新されていま
す。関心のある方は情報収集を続けられることをお
勧めします。

その際、「自分の意見を持つ」ことが重要です。自
分の意見がない(目的もない)状態で情報収集をす
ると「情報に溺れたような状態」になってしまいます。

「情報に溺れたような状態」になった場合は、テ
レビ・新聞・インターネットといった情報源から一
度離れ「誰かと会話する」という方法が有効です。

私たちができること

「不安」を感じている人に対して、新型肺炎とはこ
ういうものという「事実」を説明しても、会話はチグ
ハグになります。会話はキャッチボールのようにお
互いの考え、想いを受け取り、伝えることです。不安
を吐露したり、受け止める場面を大切にしましょう。